

史跡 末松廃寺跡

末松廃寺は、戦前戦後の発掘調査により遺跡の概要が明らかになり、昭和四十五年に県下で最初（全国で三番目）の史跡公園として整備されました。

寺域の中央の東に仏舎利を納める塔、西に本尊をまつる金堂を配した白鳳時代（西暦六六〇年頃）の寺院で、いわゆる法起寺式伽藍構成をとっています。

この寺院は、これまで石川平野一帯を支配した豪族の「道の君」一族の氏寺であるという説が有力でしたが、最新の研究成果により天智朝におこなわれた国家的開発プロジェクトの人心掌握のための巨大なモニュメントであったとも考えられるようになりました。

昭和十四年 国指定史跡



塔

塔は仏陀ぶつだの舍利しやり（骨）または一般に聖なる遺物を祀った建物です。塔には、中央の礎石そせきを囲み四天柱礎してんちゆうそが四基、この外側には側柱礎そくちゆうそ十二基がそれぞれ間隔三・六mで三×三間の正方形に配置されていました。これにより塔の大きさは一辺一〇・八mと、白鳳時代はくほうじだいとしては非常に大きなものであることがわかり、七重塔とも考えられています。

奈良時代になって、末松廃寺は一度倒壊しますが、その後再建された時には塔は再建されなかったと思われ、代わりに「瓦塔がとう」といわれる焼き物の塔が跡地に置かれていたようで、その破片がいくつかが発見されています。



金堂

金堂は本尊ほんぞんを安置する仏殿ぶつでんで、寺院の中心となる建物です。この堂において、いろいろな法会ほうえや礼拝がおこなわれました。金堂の規模は東西一九・八m、南北一八・四mであり、まわりには素掘りの雨落溝あまおちみぞがめぐり、その上には倒壊したときに屋根から滑り落ちたと思われる創建時の瓦が大量に堆積たいせきしていました。とくに、この金堂の西側で昭和三十六年に銀製の和同開珎わどうかいちんが一枚発見されており、全国的にも注目を集めました。

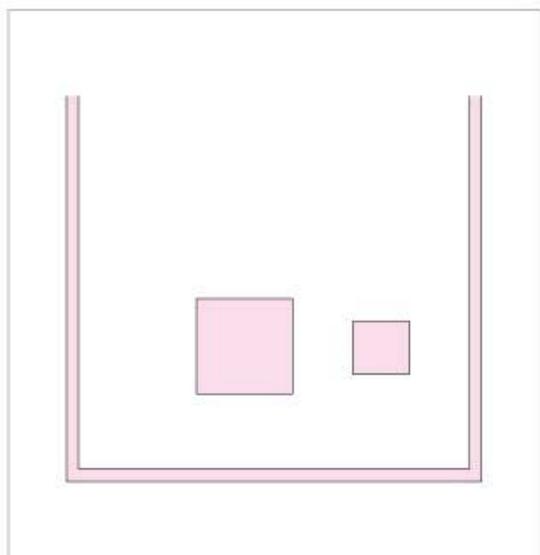
奈良時代に再建された金堂は、創建時のものよりかなり小さくなり、中心軸も若干東にずれています。また、屋根も瓦葺かわらぶききではなくなっていたようです。



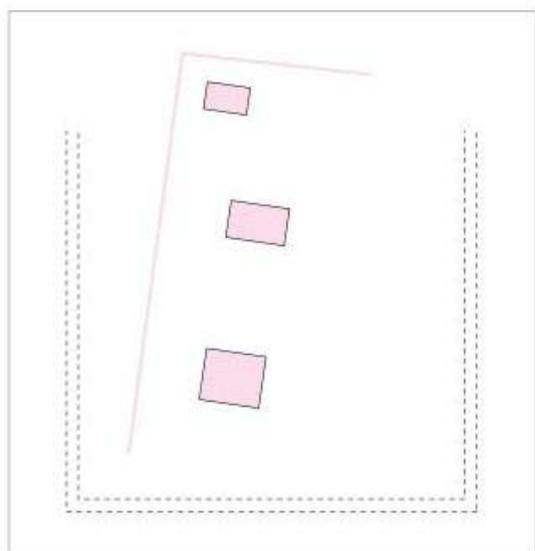
末松麿寺の変遷

へんせん

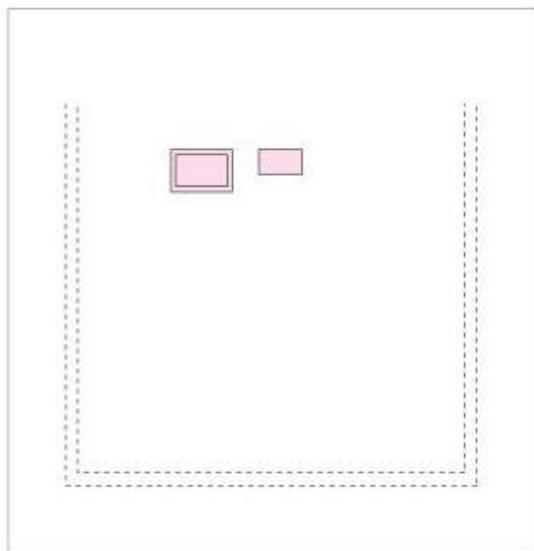
末松麿寺は、お寺としては三度建て替えられています。最初（西暦六六〇年頃）は塔と金堂、築地を備えた大きな法起寺式の寺院として創建し、その後奈良時代の早い時期に縮小した金堂と北側の掘立柱建物、板塀と思われる塀からなるひとまわり小さなお寺として再建され、最後は北側の掘立柱建物二棟からなる姿に移り変わっていきます。その後は目立った建物は発見されませんが、中世の墳墓などが見られることから、何らかの宗教施設として存続していた可能性が考えられます。倒壊したと思われる時代は、周辺の集落遺跡がまさに隆盛を極める時期であり、なぜ放棄されてしまったのかは大きな謎です。



▲白鳳期の末松麿寺



▲天平期の末松麿寺

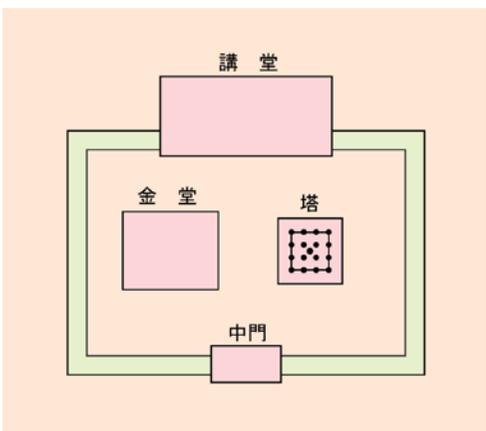


▲平安前期の末松麿寺

末松廃寺と周辺の寺院関連遺跡

七世紀代に建立された大寺の伽藍配置は、飛鳥寺以降、四天王寺式、川原寺式、法隆寺・法起寺式、薬師寺式と移り変わっており、末松廃寺はこの中の法起寺式を採用しています。

このころの北加賀では、七世紀末に金沢市の広坂廃寺が、九世紀に入ると津幡町の加茂廃寺が建立されます。この内、広坂廃寺は発見された瓦の文様が藤原宮や平城宮などの都を意識したものであり、在地色の強い末松廃寺とは対照的です。また、これらはいずれも平地に建立された寺院ですが、北陸地方では八世紀半ばころから平地に近い山間地で、人里から少し隠れた場所に位置する山林寺院と呼ばれる寺院が出現します。末松廃寺からほど近い、金沢市三小牛に存在する三小牛ハバ遺跡はその代表的なもので、通常の「おつとめ」とは異なる、山林修行の場であったと考えられています。



伽藍配置図



周辺遺跡地図